

(日本史) 傾向と対策

傾向

史料読解と基礎知識を組み合わせた総合的な歴史理解を問う出題

①出題形式

全問が5択(一部6択)の選択式問題で構成されており、記述問題は含まれない。大問は4題、小問は1題あたり10問、全体で40問という構成が基本となっている。

出題形式は大きく3種類に分類できる。第一に空欄補充問題。文章中または史料中の空欄に人名・地名・法令名・事件名などを選んで入れる形式で、最も多く出題されている。第二に下線部問題。文章中の下線を引いた語句や事柄について、内容の正誤や説明として正文・誤文を選ぶ形式である。第三に史料読解問題。史料を提示し、その内容・背景・作者などについて問う形式である。史料は、各時代の代表的な史料とともに受験生にとってはなじみの薄い史料も含まれるなど多様だ。

②出題内容

時代としては、原始(旧石器・縄文・弥生・古墳時代)から近現代(明治～戦後)まで幅広く出題されており、特定の時代への偏りは見られない。分野的には政治史・外交史・経済史・文化史がバランスよく扱われており、特に文化史および政治史が重視される傾向がある。

具体的な出題内容を時代別に見ると、古代では荘園制度、延久の荘園整理令、受領(国司)の役割などが問われている。中世では鎌倉幕府の執権政治、御成敗式目、承久の乱、室町文化、足利義満の業績などが取り上げられている。近世では豊臣秀吉の政策、江戸時代の幕政改革、蘭学の発展、農業技術と農書などが問われている。近現代では財閥と経済政策、金本位制・管理通貨制度、サンフランシスコ平和条約と沖縄返還協定、天皇機関説、民本主義、女性解放運動などが出題されている。史料問題では史料の読み下しが提示され、作者・時代・背景・内容を問う形式が採られている。

③難易度

全体的な難易度は標準～やや高めと評価できる。教科書レベルの基礎知識があれば解答できる問題が中心を占めるが、一部に細かい知識を要する問題も含まれており、総じて基礎～応用の幅が広い構成となっている。

比較的解きやすい設問としては、人物・事件・作品の組み合わせを問うもの(例:浮世絵師の代表作と画家の照

合)や、空欄に明らかな歴史用語を補充するもの(例:「延久の荘園整理令」「御成敗式目」)が挙げられる。これらは教科書の太字事項を正確に覚えていれば対応できるだろう。

一方で難問としては、史料の内容を正確に読み解いたうえで選択肢を吟味するもの(例:古文書の「受領」「名主」「荘官」の区別)、「適切ではないもの」を選ぶ消去法問題(誤肢の判断に正確な知識が必要)、年号・西暦の換算(例:延久元年=1069年)、複数の人物・語句を同時に補充する組み合わせ問題などが難易度を引き上げている。史料読解においては、古文・漢文の読み下しを正確に理解する読解力も求められるため、単純な暗記だけでは対応できない場面もある。

対策

史料読解力と時代横断的な知識整理で得点力を高める

①教科書の精読と太字事項の徹底整理

出題の中心は教科書に記載の重要語句(太字)である。政治史・外交史・経済史・文化史の各分野について、時代順に事件・人物・法令・作品を整理し、それぞれの背景と結果(因果関係)まで押さえておこう。特に「誰が・いつ・何を・なぜ」という4点を意識した学習が有効だ。

②史料集を活用した史料の読解練習

本試験では史料が複数提示され、作者・時代・背景・語句の意味が問われる。市販の史料集を用いて代表的な史料の現代語訳と解説を繰り返し読み、古文・漢文の読み下しに慣れておくことが重要である。史料中のキーワードから時代や背景を特定する訓練も行おう。

③文化史の徹底対策

室町文化や江戸文化を具体例として、文化史は毎年複数問が出題されている。人物名と作品名・業績を対応づけて覚えるだけでなく、その文化が生まれた時代背景や社会的意義まで理解しておくこと、説明問題にも対応できるだろう。

④正誤文形式の選択肢問題への対策

正誤文の選択肢を見抜くには、正確な知識が不可欠である。曖昧な理解のまま暗記するのではなく、各事項の細部

(年代・機関名・人物の役職など)を精確に確認する習慣をつけよう。過去問演習では、なぜその選択肢が誤りなのかを必ず言語化して確認することが効果的だ。

⑤年表と地図を使った時代・空間の把握

年号の西暦年換算や地名に関する問題も出題されている。年表を用いて主要事件の西暦年を確認し、地図で地名・藩・国の位置関係を視覚的に整理しておく、空欄補充や組み合わせ問題に対応しやすくなるだろう。

⑥過去問演習による時間配分の習熟

選択式 40 問の試験では、解答スピードと正確性の両立が求められる。既出問題について、時間を計って解く練習を積み重ね、難問に時間をかけすぎず、基礎問題で確実に得点するペース配分を身につけよう。